

陽炎（かげろう）

山崎 マツ（大正9年生まれ）

4月の声を聞くと道路の氷も解けはじめ、丘の上から流れ落ちる雪解け水は銀色に光り、その下にはもう小さな芽吹きが始まっている。国境の町の春の風景である。7月に入ると宿舎近くの草原は春夏秋の花が競い合うように咲き乱れ、まるでお花畑のようである。白夜の続く国境の町で長男正和が生まれた。昭和19年12月19日である。

それから8か月、夏のある日青い空を見上げながら洗濯物を干していた私の耳に突然爆音が聞こえてきた。2機3機と編隊を組んで近づいてくる光景に私は戦争が始まった事など夢にも思わなかった。急に辺りが騒がしくなり、兵隊さんの走る姿に初めてソ連からの空襲を知ったのである。まもなく豆粒を霑く様に空からの攻撃が始まった。私たちは子供を背に逃げ惑い、近くの丘に身を潜めて背丈ほどもある夏草の中から、パチパチと落ちる鉄の塊を見ていた。やがて軍の指示に従って駅に集合し、すし詰めになった列車の中で出発を待った。行き先も分からないまま列車は動き出した。途中攻撃されそうになり、次の列車は転覆した事を後で知った。

何回か空襲に怯えながら1週間後、満州と朝鮮近くの国境の村の寮に落ち着く事になった。そこで初めて日本が戦争に負けた事を知ったのである。寮といっても殆ど断水状態、食事は高粱粥に、皆下痢をした。幼児は麻疹に罹り、肺炎の高熱で喘いでいても、冷やしてやる水さえなかった。離乳期の正和にはどうしてやる事も出来ず、わずかな米と野菜を買って煮てやっても栄養不足の為、日毎に衰えていった。

満州の冬は早い。12月も半ばを過ぎた時、正和は何かを訴えるような瞳で私を見つめ弱々しく泣いた。私は若い医学生に診てもらおう事にし、その人は黙って注射器を取り出し、やせ細った吾子の腕に注射をした。そのとたん正和は大きな黒い瞳を見開いて私を見つめ、すーっと瞳を閉じた。昭和20年12月19日満1歳の誕生日である。寮の人がお経を上げ、同室の人が手を合わせてくれた。男の人が棺を担いで遠くに行くのを見送った後、私はその場で気を失った。その後何日か熱の下がらないまま毛布にくるまって起き上がる事が出来なかった。幼い子供たちは次々死に、今度は大人達が死んでいった。同室の人達が今度は私の番だと噂している事が耳に入ったとき、「私は絶対死なない、日本に帰るまで。」と自分に言い聞かせていた。

やがて氷も解けて国境の町にも春の日差しが感じられる頃、私もようやく起き上がれるようになった。倒れて以来一度も靴下を脱いだ事のなかった私は凍傷で両足の指が真っ黒になっているのを見て全身から血の引くような衝撃に震えた。指先から私の体が腐っていくのではないかと思った。漸く歩ける様になった時、私はまず正和のところへ行かなければと思った。そこは坂道を登りつめた丘の上であり、墓標がたくさん並んでいた。若草が少しずつ伸び始め、丘の上には陽炎がゆらゆらと萌えていた。私は正和の墓標を見つけた時、なでながら、「ごめんね、一緒に日本へ帰ろうね」と話し掛けてやった。お骨にして帰ろうと決心した。元大工だったという人に頼み、ある晴れた日、スコップを持って丘へ登った。掘り上げた棺の中の着物の柄で正和であることを

確認した。傷みかけていた棺を縄で縛り、天秤棒^{てんびん}で担ぎ丘の上から河原への斜面を何度も転びながら降りて行った。そして手を合わせながら火をつけた。小さな棺はまもなく燃え尽き、私は細い骨を残さず拾った。

やがて夏草が黄色に染まり秋風の吹く10月末、私は小さな遺骨を抱いて日本に帰ってきた。しばらくして夫がシベリアに抑留^{よくりゅう}されているという知らせが入り、それから1年余りして夫も無事故郷^{こきょう}に帰ってきた。命あってこそどんな逆境にも耐えていける。過ぎ去った年月を振り返りながら私は命の有難さをしみじみと感謝した。夫が逝って19年。戦後60年を過ぎた今、私の記憶も薄れていき、戦後生まれの子供たちは兄正和がいたことを知っていても詳しい事は知らない。私は正和の事をあまり語らなかつた。涙が先に出て語れないのである。私達家族の事を書き残しておかなければならない。私は日記帳を買うと必ず子供たちの生年月日を書き入れる。もちろん正和も忘れずに・・・

国境の凍土の町に逝きし子の
命日記せり新しき日記に

これから私もどの位生きられるか分からないけれど残された命を大切に感謝しながら生きようと自分に言い聞かせている。

夫の日記にこんな句が記されていた。

虜人の歌（シベリアにて）
吾子遠く 夢と白夜は つづくなり。
吾子遠く 枯野の月の 彼方なる。

悼む（吾子の命日に） 父
菊花散る 過去振り返る いとまなく。
炭火搔 汝が忌日の 淋しくて。